UrbanDesignLab.Magazine 11
都市デザイン研究室マガジン
vol. 272 / Nov. 30th 2018

“理想”と都市計画

The meaning of "Ideal" in Planning.

中国東北部、終戦まで「満州国」が存在していた地域。そこでは日本人都市計画家が“理想的な”近代都市計画を実践していた。

▲長春の都市軸を背景に。中央奥に伸びる広幅員街路・旧順天大街の右には旧軍事部、左には旧国務院。

研究室旅行 2018 in 長春

Overview of Labolatory Trip 2018 in Changchun.

text_HARA /M1

現地の先生の案内による街歩きと WS というこれまでの研究室旅行からやり方を変え、今回の研究室旅行は事前に輪読会（P7 参照）を行ってから、実際に現地をまち歩きするというやり方に。

行先は中国東北部の都市・長春。旧「満洲国」の首都・新京であったこの地は、今でも当時の都市基盤が、建築が、緑地が生き残っている。

この地に加え、瀋陽と大連にも足を延ばし、それぞれの街を眺めてきた。

11/19（月）

旧満鉄付属地から散策を始め、少し移動して、今も残る路面電車に乗車。路面や沿線空間は非常に魅力的な整備が。宮殿予定地の御花園を眺め、長春駅へ。現地の人と相席の硬座で中国鉄路を味わいながら瀋陽に向かった。

11/18（日）

旧城内と旧商埠地をテーマに街歩き。旧商埠地のカオス的雰囲気は健在か。最後に偽満皇宮博物院となっている宮殿を見学。実際には溥儀は住まなかったというが、このような縁辺に皇宮を用意された溥儀は何を思ったか。

11/16（金）

旅行初日は、簡単なまち歩き。南関駅（南关站）から旧城内の縁辺を歩き、旧・大同広場（現・人民広場）へ。

11/17（土）

既に氷の張っている南湖公園から歩き始め、官庁街であった旧・順天大街（現・新民大街）を北上。今も残る興亜建築の並びは圧巻。その北端にそびえる宮殿は建設半ばで終戦を迎え、戦後中国が原設計に沿って完成させたもの。

Schedule

11/16~19：長春（旧・新京）　10 名
11/20　　：瀋陽（旧・奉天）　8 名
11/21~22：大連　　6 名

Members

助教：永野　　D1：三文字
M2 ：清水、中戸、松本
M1 ：仙石、原、藤原、松本、山口

泥と氷の上の都市

The City on Mud and Ice.

格子状と放射状の道路の巧妙な重ね合わせの中に通る強力な都市軸。周囲にゆったりとした時間を流れさせる巨大で静かな人口湖。威容を誇り、どっしり構える興亜式の建築群。

当時、理想を追い求め、その最先端の技術を用いた都市計画家たちは、ゼロから造り上げた都市が、80 余年を経た現在も未だ使用に耐えるどころか、心地よさと魅力を感じさせている場面を見たら、何を思うであろうか。

一方で、この土地の都市計画が侵略行為の結果として行われたことは忘れてはならない事実だ。あくまで“理想”は住民の意見が皆無に近いという、いわば「氷」のような前提の上にあったのだ。

人の生活を扱う都市計画は、理想と合理性だけを立たせるわけにはいかない。それらと現実の狭間で泥臭く、小さな解決を積み重ねていかなければならない。それはむしろ、敵であった日本が残した都市を破却することなく、逆にそれに合わせた建築を新築すらした戦後の中国人の中に見出すことができるのかもしれない。理想を成り立たせた「氷」が融け、敵国の残した現実という「泥」の中でもがかねばならなかったのだ。

11 月にして氷点下の大地は、人が住むには厳しい場所だ。新京となる以前の長春は、冬には土地が凍り付き、それが融ければ泥沼の広がる荒地であったそうだ。私には、今も長春が「泥」と「氷」の上にあるように思えてならない。

本格的な寒さではないが、長春の自然環境の厳しさの一端を文字通り肌で感じながら、1 日 15 ㎞ほどの行程を実際に自らの足で歩き通した。そんな参加者たちのレポートは次ページから。

編集長：中戸翔太郎　編集部員：岡山紘明 , 但馬慎也 , 原洪太 , 藤原大樹 , 前山倫子 , 山口智佳
東京大学都市デザイン研究室　http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/

▲『最新地番入　新京市街地圖』(1937 年) 三重洋行より作成

訪れたうち一部をプロット。写真入りで現存する建築物、構造物、公園、広場などを説明する冊子を作製予定ですので乞うご期待！

長春（新京）の街―計画と現在

The Streets in Changchun (Hsinking). - Planed City and Realized City.

緑地

Open Space

text_FUJIWARA /M1

長春の地図を眺めるとまとまった緑地が点在しているのが分かる。北部の勝利公園、東部の動植物公園、南部の南湖公園、西部の御花園などである。この内、勝利公園、動植物公園、南湖公園は満鉄、満州国時代に公園として建設されている。当時の長春 (6.4 万人 ,1936) の 1 人当たり公園面積は 3.41㎡ / 人であり日本の都市 (25 ～ 30 万人 ,1931) の 0.8㎡ / 人に比べて非常に高い水準である。この時代の公園には共通して花壇、温室、噴水、動物舎といった施設が見られる。特に温室や動物舎は冬の寒い満州に特徴的な施設である。また、記念碑等も多くあり、南湖公園の解放紀念碑が立っている場所も元々は大東亜戦争宣戦記念塔の建設が予定されていた。御花園は宮殿予定地の北部の庭園が原型である。約 20ha の広さで、洋風の風景式庭園であり、中央の広場に接した池を巡る回遊式庭園でもあった。現在、池は周囲を回遊できるようになっており、各所に中国風休憩所が設けられている。

公園も含む緑地区は 1938 年時点で、市街計画区域の 4 割に相当する 4 万 ha 計画されている。満州国民政部土木司都邑科は「緑地域設定の方針及び目的 (1936)」において緑地域制の主目的を市街化を限定することとしているが、理想的な都邑規模を持続させるためとまでは考えておらず、必要に応じて変更できる緑地であった。都市計画図で長春徳園～動植物公園に存在しているはずの緑地が現存しないのはこのためであろう。現在、人口増加により、市街地計画区域の外側に設けられていた緑地区が工場や住宅などに開発されている。東京で実現しなかった緑地帯を長春で残してもらいたいものである。

Picture Data（左上）
「満洲国」建国後の 1937 年に黄龍公園として建設が開始された公園。現在では南湖公園という名前で长春市重要风景区 (長春市重要風景区) となっている。
所在地：吉林省長春市朝陽区工農大路 2715 号

都市基盤

Infrastructure

text_SHIMIZU /M2

新京の計画図、そして現在の長春の地図を見ると、碁盤の目状の町割の上にいくつかの点から道路が放射状に走る様が目につく。欧米を参考に完全な近代都市を目指した新京は、現在の長春の超車社会化に耐えうる高い道路率を誇り、その道路が収束する位置に大きな円形広場が位置している。人民広場・新民広場など、これらの円形広場は現在ラウンドアバウトの中心として広大な緑を湛え、記念碑や給水塔が立ち、周囲の建物はみな広場に正対して立つなど、「都市のイメージ」における強いノード性を持っている。それは車両の流れにより人の出入りが極端に制限された閉鎖系の広場であり、都市の中心に君臨しているものの実用には与しない様は、その「広場」が満鉄や満州国など、日本により生み出されたものであるにも関わらず、いかにも中国的広場観の上に成立しているものだと感じられた。近代国家を支える高規格なインフラとしてそれぞれの円形広場が整備されて 80 年以上が経つが、当時の計画が今の都市の中心のあり方をこのように規定していることを考えると、計画時に埋め込まれた新京の DNA の根強さを思い知らされ、今後そのあり方が変容することがあるのか、とても興味深い。

Picture Data（右上）
旧満鉄付属地に 1912 年に建造された給水塔。「新京」の西高東低の地形を活かして付属地西側に建てられて付属地に水を供給した。現在では市级重点文物保护（保護）单位となっている。
所在地：吉林省長春市寛城区北京大街 62 号西広場

建築

Architecture

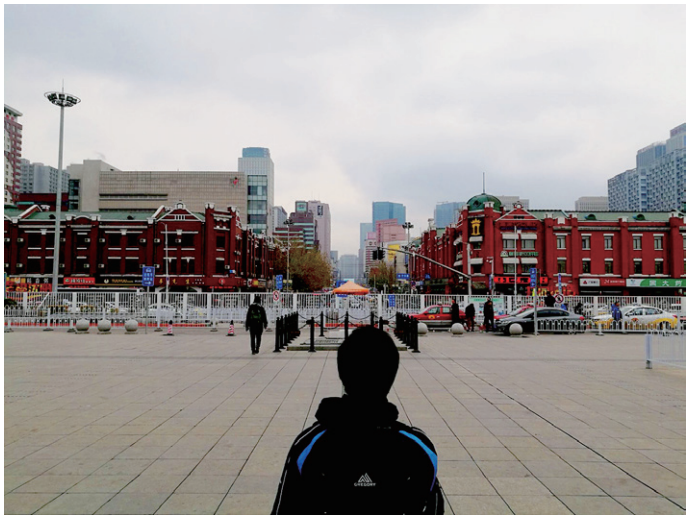
text_NAKADO /M2

満州国時代の官庁建築（興亜式建築様式）が群として今も残るのは「新民大街」。満州国時代の都市計画で軸線として整備された骨格のうちの一本、当時の「順天大街」であり、国務院や交通部といった満州国の官庁機能が集約された通りだった。70 年以上経った今訪れて、ここにはまだたくさんの建築が残されているのに驚く。今はそのうちの多くの建物が吉林大学のキャンパスとして使われている。大学の性質上、建築のスペックが古かったり合理的でない余白のある空間の作り方をされていたとしても歴史性を重視してそのまま利用しているのだろう。満鉄のヤマトホテルなどが度重なる建物の更新で当時の様式をほとんど留めていないことと比較すれば、公的な用途に使われ保存されていることは、当時の痕跡を探す我々にとっては幸運だった。興味深かったのは、ある建物は現体制になってから建て直されただろうにも関わらず当時の建築様式を模倣していること。単に遺構として捉えるのではなく、エリアを構成する要素として興亜建築を見る視点があったのだと想像できて面白い。もっとも、夜になって輪郭線を縁取るように毳毳しくライトアップされる建物たち、波打つ原色の LED に照らされる大通りを見ると、「現代中国らしさ」を感じてなんとも言えない気持ちになるが…。

Picture Data（左下）
「満洲国」司法部として 1935 年に建設が開始され、1936 年に完成、使用開始された建物。現在では吉林大学医学院が使用しており、省级重点文物保护单位となっている。
所在地：吉林省長春市朝陽区新民大街 828 号

残り香を追いかけて

Pursue the Lingering Scent.



瀋陽

Shenyang

text_SENGOKU /M1

沈阳、日本表記では瀋陽、旧名は奉天。満州国建国以前から経済・文化・交通・商業の中心地であった沈阳は、地元民の生活・商いの場である商埠地の雑踏と、バロック様式の骨格を持つ満鉄附属地の格式高さが今でも同居する都市だ。

沈阳に降り立ち旧商埠地にて絶品のホルモン鍋を堪能した翌朝、宿泊した旧ヤマトホテルを出て広場から駅へと向かう放射状道を歩く。満州国時代の建築のいくつかがその用途を変えながら今も現役で使われているのが見られた。決して状態のいいものばかりではないが、極寒を耐え抜く逞しい建築群である。

沈阳駅に到着すると風景は一変する。辰野金吾の愛弟子が設計した駅舎に駅前広場、それを取り囲む辰野式の建築。３階で揃ったその眺めにかつて一丁倫敦と呼ばれた丸の内の姿を重ねずにはいられなかった。それにしてもなぜ中心駅の周りが開発されず当時の低容積の建築が残っているのだろうか。土地が国有で地価の概念が薄く開発圧力が弱いのか、あるいは経済中心が附属地の駅とは別個に存在したのか。はたまた日本よりもずっと景観保全の考え方が根付いているのか。駅舎の見える喫茶店、日本語を話すママの淹れたカプチーノは私をそんな考えに耽らせた。

Picture Data（左上）
瀋陽駅から東、中華路を望めば、旧満鉄事務所（写真右）などが並ぶ。威厳のある「理想」的な都市空間はここ瀋陽の地でも健在だ。
所在地：遼寧省瀋陽市和平区勝利南街２号　沈阳站 (瀋陽駅)

神田の古本市でたまたま見つけた右ページの地図２枚。今回周った所を中心にプロット。元々初期の清の首都であり、満鉄付属地が形成されてから満洲国の都市となった東北部の経済中心・瀋陽、ロシアの植民地から、日本の植民地となった大港湾を有する大連。全く異なる歴史、立地が、全く異なる構造の都市を生み出していることがわかる。

大連

Dalian

text_YAMAGUCHI /M1

大連市は植民地時代に新しく開発された都市であり、今回訪問した他都市と比較すると歴史は短く、中国特有の文化的下地が無いともいえる。ロシア統治時代に商港と新市街を建設することが決定され、1904 年には日本軍が占領し満州国の経済拠点として位置づけられた。日本はロシア時代の地域制や街路パターンを引き継ぎ、計画外の部分においては満州付属地で見られる街路パターンによる整備を行っている。日本統治時代独自の大連都市計画の特徴として２つの規則の存在が挙げられる。まず大連専管地区設定規則はロシア時代を踏襲した３区編成地域性を定めたもので、1919 年には本土に先駆けて４つの用途地域も導入した。大連市街家屋建築取締規則は永久建築による不燃化を規定したもので、これにより大連の特徴的な景観が形成された。ロシア統治時代にドイツ技師によって建てられた建物が存在していたためか、日本統治時代の建築でも他都市では見られないようなデザインが見られたのは興味深い点である。地理的な条件からコンパクトな市街内に軸が通り、歴史的建物も比較的近接して存在している特徴がある。一方で開発や観光地化による文化財保存や活用における課題の存在を感じさせた。

Picture Data（右上）
ロシア時代の市街地の円形広場に面して存在している旧･ダーリニー市役所。うっすらと重点保护（保護）単位の文字は確認できたが、メンテナンスはされていないのか、荒れつつある。
所在地：遼寧省大連市西岡区煙台街６号

旧奉天ヤマトホテル

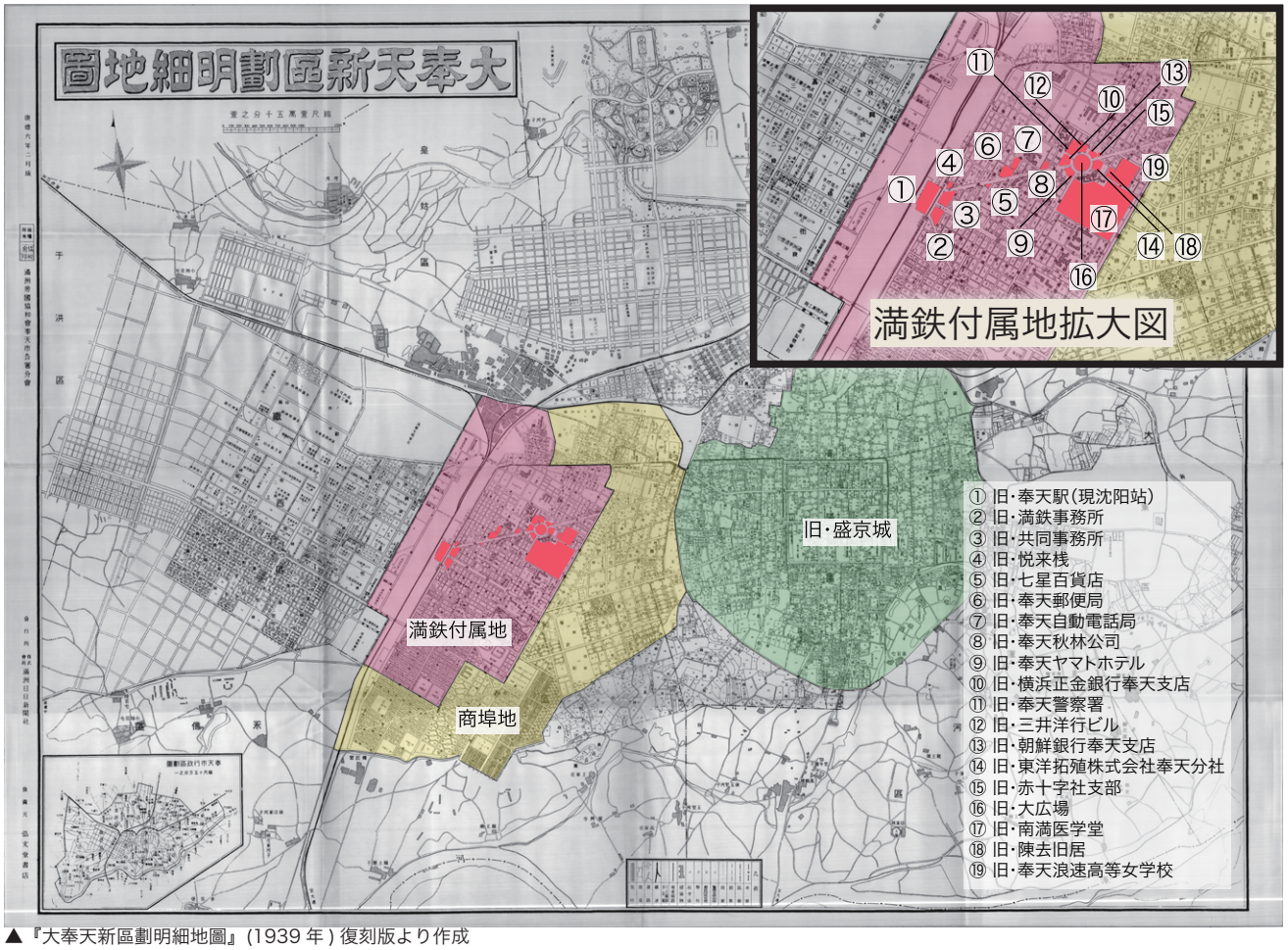
Old Mukden Yamato Hotel

text_MATSUMOTO /M1

四日目の夜、長春から瀋陽へ。瀋陽での一泊は満鉄総裁の後藤新平が欧米人の観光客や実業家の招致を目指して展開したホテルチェーン「ヤマトホテル」にて (現在は「遼寧賓館」として経営)。瀋陽のヤマトホテルは 1910 年からステーションホテルとして旧奉天駅２階に併設されていましたが、現存の建物が 1929 年に今の位置である中山広場 (旧奉天大広場) の一角に新築されました。RC 造の地上３階・地下１階で客室は 71 室。1910~1930 年代に流行したアール・デコ調で内外装がデザインされ、その姿は現在も外観やエントランス・食堂に残っています。室内の深緑のタイルや天井の装飾・独特な曲線美の階段や牛革の滑り止めが印象的で、格式高いホテルだったことを思い起こさせます。玄関回転扉の木造の枠や階段の手すりには歴史の深みを感じずにはいられません。客室は改装されているようで綺麗で､快適な一晩を過ごせました。また、北側側面の一部にはバーが併設されていましたが、外観・内装ともにヤマトホテルのかつての姿をリスペクトしたものとは思えず少しがっかり。しかし、全体としてメンテナンスが行き届き、大連のヤマトホテルが現状閉業してしまっていることもあり、ぜひこのまま経営を続けてほしい。

Picture Data（左下）
旧奉天ヤマトホテルを北側より望む。現在はツインルームで１部屋１泊 240 元ほど（約 4000 円）。
中山広場にはこの他にも当時の建築物が並び、壮観。
所在地：遼寧省瀋陽市和平区中山路 97 号

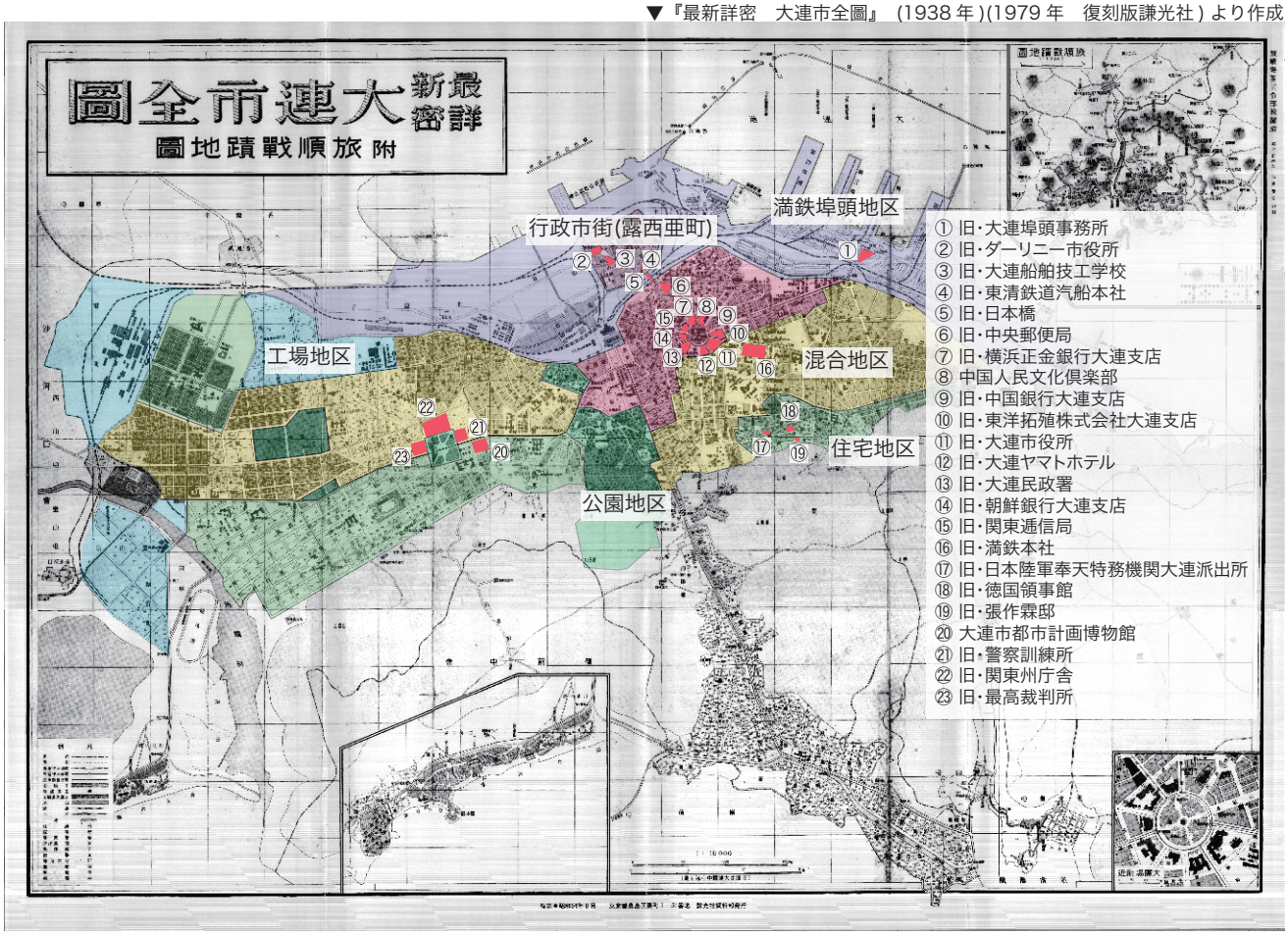
瀋陽



▲『大奉天新區劃明細地圖』(1939 年) 復刻版より作成

▼『最新詳密　大連市全圖』 (1938 年)(1979 年　復刻版謙光社) より作成

大連



この号の参考文献

・越沢明 (1988)『満州国の首都計画　東京の現在と未来を問う』日本経済評論社

・越沢明 (1978)『植民地満州の都市計画』アジア経済研究所

・天野博之 (2009)『満鉄を知るための 12 章　歴史と組織・活動』吉川弘文館

・清水 正之 , 福原 成雄 (2001)「満州の都市計画と公園緑地」,『芸術』, 24, 23-37, 大阪芸術大学

・沈燕 (2011)『伪满遗址』吉林人民出版社

・山崎ほか (1998)「東北アジア・環日本海圏の都市空間に関する調査研究その 1 中国・大連市旧「行政市街」におけるロシア時代の建造物の残存状況」日本建築学会大会学術講演梗概集

・水内俊雄 (1985)「植民地都市大連の都市形成 -1899 ～ 1945 年 -」人文地理、Vol37(5)

コラム　食い倒れ研究室旅行記

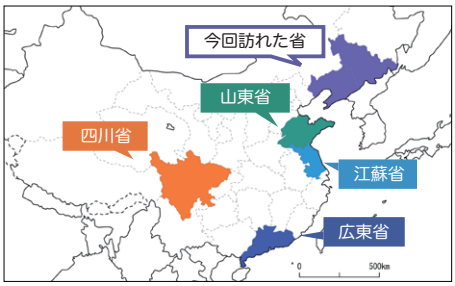
A grumet travel journal, pieces of the trip

text_YAMAGUCHI/M1

中国料理といえば餃子に激辛料理、北京ダックに青島啤酒だと思われている皆さん、それはあくまで奥深い中国料理の入口にすぎません。中国料理は地理的におおまかに四つに分けられ、例えば一般に激辛料理は四川料理を中心とした、あくまで西方系の味付けであると言えます。今回訪問した地域は、北京料理や山東料理を有する北方系に属するため、他の地域とは味付けや使用する食材、料理法は全く異なり、一般的には塩辛い・味が濃いという特徴があるといわれています。日本における東北部も塩分の濃いとわれているので、このように特徴が似ているという事実は偶然かもしれませんが、気候などを鑑みると興味深く感じられます。

さて長々しい前置きは早々に終えて、皆もすなる「食れぽ」といふものを、私もしてみむとてするなりということで、筆者人生初の食レポ的な何かをやります！

中国四大料理▶



ロバ肉蒸し餃子@長春

中国東北部では一般的な食材とのことで、「上有龍肉、下有驢肉」（天には龍の肉があり、地上にはロバの肉がある）といわれるほどの美味とか。

ということで餃子店にてロバ肉の蒸し餃子を注文したのですが…はっきり言ってロバ味なるものを感じませんでした。パサパサしており、さっぱりしているとも言えますが香りは弱めで、馬肉を考えるとロバ肉も同様に味は薄めなのかもしれません。

単に筆者の舌が役に立たなかっただけかもしれませんが、とりあえず豚などの家畜系の肉のおいしさを再確認しました。

▲やや茶色い以外は普通の蒸し餃子

酸菜炖排骨@瀋陽

大量の白菜の酢漬け (酸菜) が入った鍋に、茹でた骨付き豚肉を入れて煮た東北部の家庭料理となっています。酢漬けはザウアークラフトに似た雰囲気で、酸味がスープにじんわりと溶け出して大変体にやさしい仕上がり。

豚一匹を余すことなく食べられるのも特徴で、内臓のほか、豚の血を固めたソーセージなども入っています。豚骨ベースのスープは日本人好みではないでしょうか。ニンニク醤油をお好みでつけて食べれば飽きが来にくいのもポイントです。

ただし絶望的に写真映えしません。

▲クリーム色のスープと血ソーセージ以外の色が無い

狗肉のグリル@長春

日本人には刺激の強い食材ですが、朝鮮族はよく食べるそうで、半島から近い東北部ならではの食材なのでしょうか？その場のノリで入店してしまったため全く心の準備がないまま一口食べてみると…思ったより美味しい？？

香りにややジビエ感がありますが、クセが少なく、赤身でさっぱりとしています。逆にタレをつけていないと途中で飽きる人もいるかも。ただし足は見た目そのまま犬の足なので、人によってはやや【閲覧注意】。

ちなみに「狗宝」という部位も食べました。皆まで言わせません。

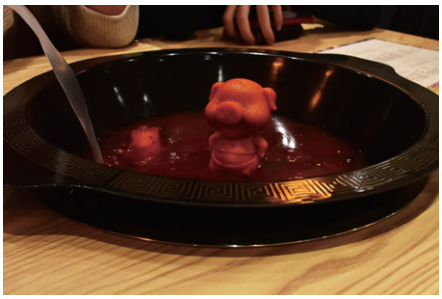
▲どこの部位だと思いますか？

火鍋@長春

いわずと知れたかなり辛い鍋。ちなみに本来は四川料理として知られていますが、この東北部でもかなり流行っているようで、旅行中でもあちらこちらでお店を見かけました。

もし中国で火鍋を食べる機会があれば日本人であることを伝えて「微辛」を注文しましょう。それでもかなり辛かったので、筆者は回避して隣の卓の無辛のトマト鍋をつついていましたが、店内はカプサイシンが舞っているのか咳が止まりませんでした。

よくわからないお肉やら野菜やら適当に入れすぎたせいで何を食べたのかほぼ記憶に残っていないのが残念です。



▲ダシに沈むスープの素　この後に具材を入れて鍋にする

清真料理@長春

回族という少数民族をご存知でしょうか？中国国内に 1000 万人いるといわれるイスラム系の少数民族です。故郷から遠く離れたここ、東北部でも彼らの料理を食べることができました。他の中国料理と比べると、全体的に脂っこくなくさっぱりとした印象でした。

何よりも羊のグリルが衝撃的なおいしさ！！ごろごろした羊肉をクミンなどを調合した香辛料につけて食べます。口内に入れた瞬間、羊とは思えないほどの柔らかさに驚愕するとともに、華やかな羊の香りが口内に充満します。この香りもしつこさがなく、良い余韻を残して消えていくため箸が進みます。圧倒的なコストパフォーマンスにも脱帽しました。

▲これがまたとんでもなくおいしい羊肉

鉄鍋炖@大連

これも東北地方の伝統料理だそうで、テーブル中央の巨大な鉄鍋に野菜や輪切りにした川魚といった具材を豪快に入れ込み、蓋をして煮込む＆蒸すこと約 10 分。これまた写真映えしない鍋となりました。大連ということで海の幸を期待しましたが、なぜか失敗して川魚に。

日本でいう味噌煮的な味付けですが、日本ほど塩辛くは感じず川魚の繊細な味とマッチする絶妙な塩加減でした。ちなみに鍋に引っ付いている黄色い物体はトウモロコシの蒸しパンです。これも日本ではなかなかお目にかかれませんが、やや固い独特な触感がお気に入りです。

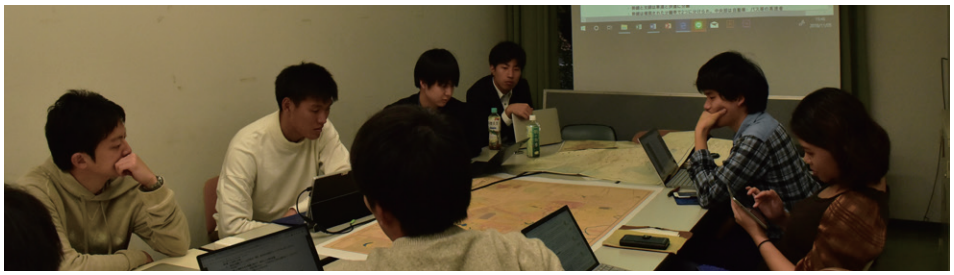
▲白菜や 2 種類の川魚、じゃがいもなどが入っている

輪読会開講！

Open discussions about "Manchukuo" for the lab trip

text_YAMAGUCHI/M1

研究室旅行を直前にひかえた 10 月下旬から 11 月上旬にかけて、旅行参加メンバーに急遽参加できなくなった M1 等を加え、計 13 人で輪読会を計 3 回に分けて行った。越澤明先生 (北海道大学名誉教授) の著作を利用して、担当者には事前に該当章のレジュメ作成と資料収集、論点整理を行ってきてもらい、輪読会では実際に約 A0 サイズの地図に情報を落とし込むという形で進行した。現地では実際に輪読会で作成した地図を参考に、極寒のまちなかを縦横無尽に歩き回り、地図は紙が擦り切れるほどの大活躍を見せた。



▲輪読会中の発表風景

今回は歴代の研究室旅行とは異なり、学生たち主体で対象都市を設定し旅程を計画したため、学生自身で都市に関して学習、論点を設定するという工程を踏んでいる。企画、運営は今回の研究室旅行のマネジメントを一手に背負い、今月号の編集でも大活躍の M1 原。今回用いたのは、『満州国の首都計画』(ちくま学芸文庫) と『植民地満州の都市計画』(アジア経済研究所) の 2 冊。今回のメインである長春 (新京) についてかかれた『満州国の首都計画』は全章を輪読の対象とし

▲輪読会で作成した地図 (長春)

年代ごろに復刻された 1930 年代の地図を格安で購入することが出来た。それらの地図は P.5 でも記載しているので是非じっくりご覧になっていただきたい部分である。

一方で長春のパートで利用した『満州国の首都計画』は、一冊全て長春に関して割かれており、満州国興国以前の長春から始まり、戦争末期までの都市計画が豊富な図面と共に記述されているので、全てを網羅的に反映することは難しい。そのため各章の担当者が本文たが、『植民地満州の都市計画』は延長行程として訪れる、瀋陽 (奉天) と大連の該当するページのみの扱いとなった。

著者の越澤先生を改めて紹介させていただくと、東京大学工学部都市工学科、同大学工学系研究科修了後、北海道大学大学院教授などを歴任してきており、数多くの著書を手掛けられている。例えば『東京の都市計画』(岩波書店) は明治の市区改正、後藤新平の帝都復興事業から現代に至るまでの東京都市計画史を新書

▲現地での打合せ風景

を読み、その後は担当者個人の興味に基づいて自由に論点設定や、論文などの資料収集を行ってもらい、それらを輪読会にて共有してもらった。実際に輪読会では担当者によって整理された論点を基にディスカッションを行い、参加者の理解を深めつつ、情報を取捨選択していくことで実際の旅行で見るべき場所のリスト化などを行った。

研究室旅行にも地図を持参し、前日に翌日に向かう予定エリアとテーマの打合せを行った。街歩きの最中でまとめたものとなっており、都市計画の入門書としても一般書としても利用できる一冊となっている。

瀋陽、大連にて参照した『植民地満州の都市計画』は、越澤先生の都市計画学会論文奨励賞を受賞した博士論文「満州の都市計画に関する歴史的研究」をベースに加筆・修正されたものとなっており、瀋陽と大連における都市計画の概要と、各都市の特徴に注目されて述べられている。大きなサイズの地図の入手は課題であったが、ちょうど開催されていた古本市にて 1980

▲適宜情報をアップデート

も適宜自分たちのいる空間の計画を確認しつつ、歩いたルートの記入や、新たな資料を発見した際には地図の加筆・更新も行ったため、非常に充実した内容の地図が完成したように思う。

なお、プロットした地図や議論された論点といった輪読会の成果は、研究室旅行全体の成果と合わせてまた改めて公表するつもりである。年度末には発表できるように M1 一同取り組んでいきたいと思う。

Information

今月も様々なイベントがありましたが、M2 の方々の PJ からの引退ラッシュにもなりました。M1 一同改めて気を引き締めていきたいと思います！

Hey listen, -ちょっと聞いて！

11.07　TCha 交流会@ kudan house

東京文化資源会議の交流会が九段で開催、上野 PJ の今までの成果を展示しました。築 90 年のお屋敷、山口萬吉邸をリノベした立派な会場にも感銘。M2 はこれにて引退です！ (M2 中戸)

11.23　夜咄会・釣り篇開催

居住に関する調査報告＆それを踏まえ趣味と共に居住を考える企画の第一弾・釣り篇。地域の釣り好きの方々をゲストに、三国で釣りを楽しむ暮らしの形を考えました。(M2 澤山)

11.23-25 こちらのゾーン駒祭出展

都市工と小布施の連携の展示と、東京の中で使う場所をプロットしたり、形容詞で各所の印象を考える WS を開催。多くの方にご参加頂き、充実のマップが。(M1 原)

11.28　大学院演習中間ジュリー

演習が開始してから約 1 か月、中間ジュリーが行われた。発表直前までスライドを作成する等時間との闘いであったが、なんとか発表にこぎつけることが出来た。(M1 山口)

11月の Webマガジン

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

11.10-11 手賀沼「ヌマベ・ザシキ」実施！
手賀沼の水辺空間（＝ヌマベ）にお座敷を設け、楽しい余暇時間を過ごす社会実験・イベントを実施。(M2 清水)

11.23-25 丸岡城内堀の居住調査
内堀地区では増加する空き家の活用や将来的に内堀を再建する計画がある。各家を訪問し居住意向や計画への印象を伺った。(M1 前山)

12 月の予定

Lab Meeting
6th, 13th, 25th

4th (Tue.)	富山市現地調査
10th (Mon.)	現地発表 @ 鞆
11th (Tue.)	西村先生を囲む会
20th-22th	現地調査 @ 内子
25th (Tue.)	研究室忘年会
26th (Wed.)	大学院演習最終ジュリー
27th (Thu.)	三国高校生空き家イベント

編集後記

目が覚めれば、午前 6 時。昨晩北京から乗り込んだ夜行列車は公主嶺のあたり。もうあと 30 分もすれば長春駅に着く。適度に規則正しく揺れる列車の中、寝転びながら窓外を眺める。中国語ではこの時の感覚を「放空」と言うらしい。なんとなく字面から察せられる。煩わしいことなど考えず、ただ外の景色を眺めればそれが放空だろう。一方で、僕は未だ見ぬ街に思いを馳せる。長春はどんな街であろうか。まだ少し眠い。揺れに任せてもう一眠り ...。(M1 原)

URBANDESIGN
LABORATORY